

インタビュー映像は、計4本で構成されています。

今回は2本目です。

インタビューアーは、日本財団ボランティアサポートセンタースタッフの山田。

お答えいただくのは、聴覚障害者の皆川さん（紺のシャツを着ており、髪を後ろに結んでいる20代の女性）です。皆川さんは、日本にいるとき看護師として働き、現在、アメリカのギャローデット大学に留学中。

この映像でのインタビューのテーマは、日本とアメリカの文化のちがいや、ろう文化についてです。

画面情報

山田と手話通訳者が映る。

山田が日本語で話し、手話通訳者が日本手話へ通訳をしている。

皆川さんが日本とアメリカに住んでみて、文化の違いを感じるがあれば教えてください。

皆川さんが手話で話す。皆川さんの手話は手話通訳が音声日本語へ通訳している。

3年ほど前からアメリカで暮らしているのですが、驚いたことがありました。

お店やレストランなどに行くと、店員さんはろう者と会うのが初めてなので、自分から最初に聞こえないことを伝えます。するとすぐに筆談をして見せてくれたり、スマホの翻訳アプリを使って声を文字に変えて見せてくれたりすることが多いんです。どこから来たか聞かれて日本だと伝えると、翻訳アプリを使って英語を日本語に翻訳して見せてくれたりもします。アメリカでは国や大学など、公の場面では英語が使われることが多いのは確かですが、実際に暮らしている人々が使っている言語は本当に様々です。

聴者の友人が言うには、街を歩いていて聞こえてくる言葉は、英語だけではなく、スペイン語、中国語など、本当にいろんな言葉が飛び交っていて、それがあたり前の街の風景なんだということでした。ただやっぱり社会生活には英語が必要なんですけどね。

でも人々の第一言語は本当に様々です。だから言語の違う人に会った時には、お互いに通じ合える方法へとすぐに発想の転換をします。見せてくれたスマホの文字が英語だと思ったら日本語に翻訳されていて嬉しく思ったりしたこともありました。

でも一方で日本にいた時に、このようにアプリを使う人はあんまりいなかったです。筆談や身振りが多くですね。アメリカではすぐに発想の転換をして通じ合える方法を考えてくれる人が多いように思いました。

アメリカの人たちは多様な言語の中で育っているので、違いに気づいた時にすぐに別の手段を考えることが身についているんですね。だから私に対しては日本語が良いだろうという発想にすぐに繋がるんだと思います。

日本人は日本語が通じることが当たり前の環境にあって、外国人と接した時にどうしてよいかわからず、英語ができる人にお任せ・・・なんてことになりがちですよ。でも自分ができる範囲で方法を考え、精一杯伝えようとがんばれば、相手も不快な気持ちになることはなく、むしろ喜んでお互いに通じ合う方法を一緒に考え、歩み寄ることができるんじゃないかと思います。

山田

なるほど、ありがとうございます。確かに日本にいて外国から来た旅行者で困ってそうな人を見た時に、声をかけようかなあって思う一方、あっ自分の英語通じないかもって一歩引いてしまう自分もいるのも確かにあります。でもどちらかというとならアメリカだとそういう時に、その通じないってことを恐れなくて、まずはコミュニケーションを取ってみて、通じる方法を一緒に考えていこうっていう文化が根付いてるっていうことなんですかね。

皆川

そうですね。だから「絶対に完璧に通じなきゃいけない」なんて思う必要はないんです。ただ自分だけが相手に一方的に合わせようとするのではなくて、できる方法をお互いに確認しあいながら歩み寄っていくことが大切だと思います。

山田

ボランティアさんの中でも、オリンピック・パラリンピックでボランティアをする方で英語ができなきゃとかやっぱりプレッシャーに感じてる方もいらっしゃるのも事実だったので、逆にそういう方には肩の力を抜いて、まずは積極的にコミュニケーション取ってみようというところをお伝えするのが一番ということですね。

皆川

人は誰だって、声をかけられることが嫌だって人はいないと思うんです。声をかけられて話していくうちに、心を開き親しくなっていくというように、いろいろあるとは思いますが。

とにかくまずは出会って、目を合わせて話をするということをしなければ、出会いそのものがないまま終わってしまいます。

自分は手話が十分にできないからといって尻込みしてしまったり、英語ができないから声がかけれないなんて思う必要はありません。そんな思い込みは取っ払って、とにかくまず声をかけてみる。声をかけ、目を合わせて、話しながらお互いに通じ合える良い方法を考えていくこと。それが良いんじゃないかと思います。

その時に、ひとつの方法だけに頼って、その方法で通すのではなく、もしその方法がダメなら次の方法を考え工夫すること、それでも通じなければまた別の方法を試してみる・・・というように、いろんなコミュニケーションの引き出しをたくさん持つこと。それがとても大切だと思うんです。

その引き出しの中は必ずしも 100%である必要はなくて、20%でも良いし、30%でも良い。中には得意なものが入っている引き出しもあるかもしれません。とにかくたくさんの引き出しを持つことが大切だと思います。

山田

今の引き出しのお話、すごくいいなあって思いました。その中で引き出しを増やしていくっていうのは、日ごろからいろんな方とコミュニケーション取ったりすることで増えていくんですかね？

皆川

本やテレビを見て勉強してもなかなか身につくものではないですね。

実際に人とふれあいながら、いろいろなコミュニケーション方法を試していくことで引き出しを増やしていくことができると思います。

本から学べることももちろんあって、英語であれば、本を使って単語を覚え、語彙を増やすことも必要ですね。

でもやっぱり最終的には、その蓄積を武器に人とふれあい実践することが一番だと思います。

山田

アメリカと日本の文化の違いをお話いただきましたが、ろう文化と言うのもあると思うん

ですが、ろう文化についてご紹介いただいてもよろしいでしょうか？

皆川

「文化」を説明するのって本当に難しいですよ。アメリカと日本の文化は違うとハッキリ言っても、その「文化」という言葉は幅広く、奥深いものですよね。ろう文化も同じです。聴文化とろう文化は確かに違います。ではその違いは？となると、私もまだ明確に説明することはできません。

また、「ろう者」を説明する時に「手話を使う」という言語の違いだけで説明できるかというところではありません。多くのろう者は日常生活の中で視覚をメインに、呼び掛ける時は肩に触れるなど、主に「見る」こと、そして「触れる」ことを使って生活しています。聴者は、「音を聞く」こと、「声で話す」ことが無くなる生活は想像もできないという人が多いと思います。日常生活の中で使っている感覚には「聴覚」「視覚」「触覚」「味覚」「嗅覚」があります。本当はもっとたくさんの感覚があると思いますが、権威ある哲学者が感覚は五感で定義してしまったんです。私は、人間が自分を取り巻く環境を把握するためには五感以上にたくさんの感覚を使っていると思います。でもその「五感」で考えてみると、聴者のほとんどの人が、聴覚は絶対に必要だと思っています。

例えば病院で人工呼吸器を使う場合。自分で呼吸ができない時に使う呼吸を助ける機械です。でもこれを付けると声で話をするができなくなってしまいます。聞くことはできますが、声を出すことはできません。

ですから、必ず事前に医療者から説明をし、本人の同意を得てから呼吸器を装着します。緊急の場合はそれができないこともあります。ほとんどの場合、本人の同意を得た上で行います。

一方ろう者は、人工呼吸器をつけて声が出せないとしてもそれほど困ることはありません。ろう者の場合で言うと、手術の前後が一例です。麻酔をかけるには腕から点滴を入れますが、点滴をしていると手や腕が動かせなくなってしまいますよね。さらに体の状況をみるために血圧を測ったり、酸素濃度をみるための機械を指先につけたりすると両方の手が動かせなくなってしまいます。両手をふさがれてしまったら、ろう者はどのように意思表示したら良いのでしょうか？こんな風に両手が使えなかったら話ができせん。

聴者にとっては声が出せなくなることは大きな問題ですが、ろう者にとってはそれほどでもありません。

ろう者にとっては両手が使えないということはとても大きな問題ですが、医療者は事前説明することなく、お構いなしに点滴をしたり血圧を測ったりします。そんな風にされてしま

うと、ろう者はどうしようもありません。

「文化」を説明することは難しいことですが、今の話が一つの例です。

ろう者にとって「見る」こと、「両手が使える」ということは本当に大事なことです。検査室の例で言うと、最初の説明の後、電気が消されてしまうことがあります。例えばエコーは、暗いからこそ画像をはっきり見ることができます。でもろう者は暗くされてしまうと何も見えず不安を感じます。突然エコーのプローブがお腹に触れてその冷たさに驚いたり。このように、聴者とろう者の感じ方・受け止め方には違いがあるということを知ってもらえると良いと思います。言語の違い、手話でのコミュニケーションのことだけではなく、生活や価値観、それぞれの「当たり前」には違いがあるということを心に留めて接してもらえると良いと思います。

山田

つい私自身も考えてしまうんですけど、困ってること何かなみたいな発想で考えてしまうんですけど、そうではなくて、やはりその方がどういう文化なのかとか、そういった背景をちゃんと知ること、じゃあその人はそれだったらこういうことでもしかしたら不便感じてるのかな、何かこういう部分でサポートできるかなって発想になるかなと思いました。

皆川

その時の状況や相手によって、次に何が起こるか予測し、見通しを持つことがとても大切なんです。

自分の状況と他の人の状況は同じではありません。その人の立場になって、その後に起きる状況を想定して、必要なサポートを前もって準備しておけると良いと思います。

ここで2本目のインタビュー映像が終わります。

3本目のテーマは、アメリカのマスク事情と、マスクによるコミュニケーションのしづらさについてです。

ぜひご覧ください。